

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	趙 芙蓉
論文題目	シャマンとして生きる —中国内モンゴルのホルチン・シャマニズムの再活性化の事例より—		
(論文内容の要旨)			
<p>本学位申請論文は、中国内モンゴルのホルチン地方において1980年代以降進展したシャマニズムの再活性化を事例に、文化人類学的なフィールドワークによる資料収集のもと、個々のシャマンたちが「シャマンとして生きる」とはどのような「生」のあり方であるのかを明らかにし、現代人が宗教と関わる別の可能性を考察したものである。とくに、これまでのシャマニズムの再活性化をめぐる研究において看過されがちであった、正統性をめぐって再編される師弟間のネットワーク、依頼の場におけるシャマンと依頼者との相互行為、個々人のシャマンの生活史に着目しながら分析を進めた研究であり、改革・開放後の中国における宗教の再活性化の現状を、新たな視点から詳細に明らかにした。</p> <p>本論文は全7章から構成される。序論に相当する第1章では、研究の目的、問題の所在と先行研究の概観、本論文の視座、が明らかにされる。第2章では、まず、調査地とした内モンゴルのホルチン地方の歴史、暮らし、宗教生活にみる伝統と変容に関する基礎的な情報が概観される。そのうえで、改革開放後のホルチン地方におけるシャマニズム再活性化の現状が検討され、当該地方ではシャマニズムが文化大革命の激しい弾圧にもかかわらず潜伏した形で継承されてきたことが、再活性化の底流にあったと指摘される。</p> <p>第3章では、ホルチン・シャマニズムの再活性化を通じてシャマンの形態が多様性を増したばかりか、シトゲンと呼ばれる憑依霊とシャマンとの相互交渉が複雑に組織され、ときに両者に激しい葛藤さえをも引きおこすことが、豊富な事例分析によって明らかにされる。また、シャマンの世界における知識継承のプロセスが、グリム(治療儀礼)、テングリ(最高神)を祭る儀礼、ダバー・ダバフ(シャマン試験儀礼)などの詳細な実践例をもとに解明される。さらに、チベット仏教を象徴する要素が色濃く残ることがホルチン・シャマニズムの特徴の一つとなっている一方で、再活性化においては動物霊をシトゲンとする場合が頻発することが指摘され、シャマン儀礼の変容と新たな動向が照らしだされる。</p> <p>第4章では、上述した動物霊をシトゲンとする事例に焦点が当てられ、正統性をめぐるシャマンたちの葛藤と遍歴が検証される。師匠シャマンのもとでの修行において、シャマンたちが求めるシトゲン認証が滞ると、新しい師匠を求めて遍歴することになる。師匠の側にも、動物霊に対する頑強な拒否から寛大な受容まで、多様な対応が見られる。憑依霊の正統性をめぐるといった葛藤に苦しみながら、シャマンたちが霊的な世界の拡がりを果敢に追求し、師弟間ネットワークの再編成を駆動させていることが照射される。</p>			

第5章では、依頼対処の場におけるシャマンと依頼者との相互行為の詳細な事例分析をとおして、現代ホルチン地方社会の抱える諸問題が照らしだされるとともに、依頼者にとってシャマンを「信じること」の源泉が「言い当てられる」驚きにあることが指摘される。また、依頼の場で発信されるメッセージは、ホルチン社会の伝統的な倫理規範と合致するがゆえに、こうした規範の密かな拡散と更新を促す効果を担っていると論じられる。

第6章では、シャマン個人の生き方に焦点が当てられ、シャマンたちのライフヒストリーをもとに、彼ら／彼女らがさまざまな葛藤を経ながらも、家族や共同体の仲間たちに支えられて、一人の人間として成熟してゆく姿が活写される。さらに、シャマンとして「生きる」ことは、その社会で「生かされている」ことであり、シャマンの人間性に対する評価が彼ら／彼女らの活動を継続させる重要な動因となっていることが明らかにされる。

第7章は考察と結論に充てられ、再活性化の多様性と正統性をめぐる交渉、人間とシトゲンによって作り出される空間において発信されるメッセージの意味、ローカルな倫理規範、シャマンの「人間性」といった論点が改めて焦点化される。ここから、シャマン個々の「生」は、霊に選ばれた者としての宿命を全うし、師弟間ネットワークや地域社会の倫理規範と絶えまなく交渉を重ね、同時に自らの家族の幸福を願うという、不屈の意思に貫かれていることを浮かびあがらせる。こうしたシャマンの困難な生の歩みは、現代人一人一人の生き方の探求に参照点を与えてくれるものであると結論づけられる。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、中国のモンゴル社会における改革・開放後の宗教復興の動態に関して、とくに内モンゴル自治区東部のホルチン・モンゴル社会におけるシャマニズムの再活性化に焦点をあてて、文化人類学的な視点から分析と考察を加えた民族誌である。内モンゴル自治区において、とくにホルチン地方はシャマニズムの再活性化が盛んに展開した地域として知られ、これまでに文化人類学・宗教学において関心を集めてきており、少なからぬ論考が蓄積されている。

申請者自身がホルチン・モンゴル出身者である背景を存分に生かした本論文は、これまでの研究にはみられない豊富で詳細なフィールド資料の収集・分析にもとづき、改革・開放後の内モンゴル自治区におけるシャマニズム活性化の実態を鮮やかに照らしたモノグラフとなっている。とくに、これまで取りあげられることのなかったシャマニズムの多様な形態を明らかにし、シャマンとして生きる人びとの「生」それ自体に肉薄した点で、画期的な宗教民族誌であり、モンゴル・シャマニズム研究への大きな貢献を成し遂げた。本論文においてとくに評価されるべき点は以下の4点である。

第一に、6年の期間にまたがり現地調査を延べ13ヶ月間にわたって継続することにより、きわめて厚い記述を積み重ね、自文化を対象とする「ネイティブ人類学」に対して方法論上の大きな寄与を果たした点である。直接観察から得られた一次資料を厳密に検討することにより、当該文化の外部からの分析と内側の視点からの共感的な理解とをバランスよく融合し、現在形で進行しているホルチン・シャマニズム再活性化の動態を驚くほどのリアリティをもって描き出すことに成功した。

第二に、依頼対処の場が伝統的な世界観の再確認される社会空間となることは従来の研究でも指摘されてきたが、その現場におけるシャマンと依頼者、あるいはシャマンと憑依霊との間で交わされる相互行為の実態は、少なくともホルチン・シャマニズムに関しては、これまで十分に解明されたとは言いがたい。本論文は、依頼対処の場への徹底した参与観察を通じて、会話を含む相互行為の精密な記述と明晰な分析とを成し遂げた点で、とくに高く評価できる。これにより、シャマニズムの再活性化という状況においても、シトゲンと呼ばれる霊的な存在の名のもとに発信されるシャマンのメッセージが伝統的な規範の更新を促すばかりではなく、彼/彼女が依頼者の境遇を不気味なまでに「言い当てる」ことが、一般のモンゴル人からシャマンその人へ寄せられる篤い信頼の源泉となっているという事実がはじめて明らかにされた。

第三に、従来のモンゴル・シャマニズム研究においては、「正統」と目されるシャマニズムの形態が主要な研究対象となってきた経緯がある。これに対して、本論文では、再活性化によって登場した多様なシャマニズムの形態に目を向け、その正統性をめぐって繰り広げられるシャマンたちの葛藤を考究した点が、とくに独創的である。これにより、新たな師弟間ネットワークが、シャマンたち自身の絶えざる交渉と試行錯誤的な実践を通じて、流動的に構築されていくことが明らかになった。

第四に、シャマンの「生」それ自体を共感に満ちたまなざしをもって見つめた点が本論文のもっとも際立った特色である。これにより、ともすれば精神疾患と境界を接するようなシャマン個人の特異性や周縁性に注目しがちであった従来のシャマニズム研究に対抗して、シャマンの等身大の「人間性」を生き生きと描ききることに成功した。そこから浮かびあがるのは、巫病の苦悩に苛まれ、正統性をめぐる葛藤にあがきながらも、ローカルな規範のもとで家族や仲間たちに支えられながら生きる、一人の人間の真摯な姿である。

以上のように、本論文は、内モンゴルのホルチン・シャマニズムの再活性化について、いくつもの新たな知見を示した点で高く評価できる。その一方で、モンゴル・シャマニズム全体におけるホルチン・シャマニズムの位置づけ、憑依霊の正統性をめぐる文化史、また正統性と異端に関わる諸理論の包括的な検討など、いくつかの課題も残されている。しかし、シャマンとして生きるホルチン・シャマンたちの「生」を実証的に明らかにした初めての民族誌として、文化人類学・宗教人類学に優れた寄与をなしたことは疑う余地がない。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成26年1月30日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公表可能日： 2014年 3 月 31 日以降